

コウノトリのエサ場となる 江戸川河川敷の自然再生、湿地づくり

自然通信社 田中 利勝

○ 野田市によるコウノトリ飼育・放鳥

コウノトリが飼育されている野田市江川地区は、14年前までは住宅開発のための区画整理が進められていました。タカ類も多いこの地を「湿地里山ミュージアムとして保全しませんか?」と提案したのが2002年7月でした。開発から90ヘクタールの水田型ビオトープへ、根本野田市長の英断による保全、さらにコウノトリをシンボルとして、エコロジカル・ネットワークが関東広域へと広がって行く大きなドラマの始まりでした。国が事務局となって田んぼや河川に生きものを取り戻そうという協議と実践の場が築かれていきました。

○ 田んぼに生きものがいる

野田市に続けと各地で無農薬減農薬の米づくりが始まっています。ある首長の話では、当初「無農薬で米づくりをしてよ」とJAや耕作者に話をしたところ、「馬鹿を言うな!」と冷たく対応されたとか。それでも何故そうしたいかを訴え続け、米農家の理解者も少しずつ増えたと言います。カエルやトンボ、ドジョウなどいっぱいいる田は、安心、安全なコメができる証明です。そうした良い環境に住みたいと子育て中の若者の移住者が増えているとのこと。多分、多くの野鳥も喜ぶ環境が育っているのでしょう。これを広く大きくつなげていけば、コウノトリがどこに舞い降りても生きていけるはずですよ。

○ 江戸川河川敷の湿地づくり

1997年、今までの治水、利水に環境が加わる河川法の改正で、状況は変わりました。20~30年、江戸川に関わる筆者から見ても、生きものに配慮した川づくりは進んでいました。ヒヌマイトトンボの生息地移動でも、専門委員会での長い協議と実践で成果を得、江戸川20キロ、松戸地先の浄化水を流す川の中の川づくりでも見事な自然再生を江

戸川河川事務所が行っています。川で大事なことは水と接する低水護岸部の自然的配慮でしょう。ここにしっかりと水草、ヨシ、柳が生えられるか、堤防下に草木の繁るスペースをいかに広くとれるかは、河川生態系にも、景観上も、さらに川の個性を失わないためにも必要となります。



○ 堤防を太く強くする

江戸川では10年以上前から堤防を強化するため、土を盛って大きな堤防づくりが進められています。さて、その土をどう得ようと考えたとき、管理者が目をつけたのは河川敷の土でした。洪水対策で川幅を広げ、堤防土とする、一石二鳥の考えです。そこで筆者はせっかく掘るなら湿地づくりを合わせてやろうと提案しました。工事で埋まるカエルの産卵場の代替地として、新しい池・湿地づくりを江戸川河川事務所と進めています。担当者はふつう2年で転出してしまうのですが、幸いにも今まで環境と生きもの、そして筆者を理解してくれる若者が引き継いでくれ、河川の湿地づくりは順調に歩んでいるといえるでしょう。利根川も江戸川を参考にして、カエルや野鳥いっぱいの河川空間づくりを進めてほしいものです。

筆者は1990年より月刊「自然通信」というミニコミ誌を続けています。これを核として、行政にも意見や提案をしてきました。「自然通信」月刊 B5版 年間購読料2000円 興味ある方は自然通信社まで
E-mail shizen-tsuushin@k9.dion.ne.jp